

月報

9号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 職 編集★金 慶 浩
〒654 神戸市須磨区千歳町4丁目1-3
エバークリーンプール5F
TEL (078) 734-5989

張鉞壽先生を訪ねて

谷倉佳代子

九月二三日、小畑町の中を橋本駅に降り立つ。バスに揺られて和歌山県高野町町の張鉞壽氏宅に到着。何やらなつかしい昔ながらの農家風の家が並ぶ細い道を通り抜けながら、「張鉞壽」の表札とさがしあてた。「やあ、いらっしゃい」大きな身体と満面の笑みで迎えて下さった張氏は、休日を騒がせに米たき人達に数冊のアルバムを差し出された。

X X X X X

張鉞壽氏は一九〇九年慶同南朝鮮咸安生れの在日一世である。一六歳で渡日、大阪の工場を転々とするうち労働運動にかかわるようになり、日本共産党員山田六左衛門と知り合って、全協(日本労働組合全国協議会)の活動家となる。苛酷な弾圧と民族差

別の中を飛敵に聞かれた張氏は、解放後は朝鮮人脱組の中央委員として活躍、一九四五第一二月の母國派遣団の一員として南朝鮮に渡っている。

その個人史はまさに在日朝鮮人の運動史そのものであり、激動の時代を、居することなく即ち抜かれてきた南志には頭の下がる思いがする。七六歳の今もお元気で、酒を飲めば若い者よりずっと強く、宿酔でくたばっている者達を尻目に「早よ起きんかい」と、ふとんとめくる威勢のささである。

今、張氏の運動史を編纂しようと、在日朝鮮人運動史研究会のメンバーなど数人が集まり、その作者の故郷である。この九月二三日には、張氏のお宅で貴重な資料を見させてもらった。アルバムをめくると、さまざまな時代の張氏が私室に語りかけてくれる。若かりしころの張氏は、口元もろさしまり、非法時代を生きた抜いてきた面影を見えるようだ。

解放後の朝鮮で運動家として馬鹿や、大阪の朝鮮結成一周半記念の頃など、運動史の資料となるものが少ない。刊行予定の本にも掲載するつもりである。さて問題は、張氏の「張鉞壽」をいかに書き表すこと読者に伝えられるか、ひ

と先に編纂者の力量にかかっているわけだが、始まったばかりの『張先生個人史』刊行の作業もこの先どんなに大変だろうか、と思いつつ、ギムチやミヨンデに大満足して豪遊にいった。

★ 研究報告 (一九八五・九・八日)

在日朝鮮人運動史研究関西支部会(第12回)

「報告者」 金文準(製作)

「テーマ」 在日労働総合体、全協加盟時に見られた

金若永・金文準の対立について

前回発表では金若永・金文準らML党結党後の在日労働総合体部りの在日労働総合体論や全協加盟論の理論的矛盾を指摘し、その機会的公式主義側面を述べたが、今回はその実行過程で現われた金若永と金文準らの激烈な対立を見ることによって、その本質がどこにあったか解明しようとする。

金若永らは、「朝鮮人委員会」の強力な統制の下に産業界別に再編成した上で在日労働総合体に、全協に加盟する。その場合も全協の中に「朝鮮人委員会」と設置し、二重組織形態を取ることにあって、在日朝鮮人労働者の主体性を維持し続け差別賃金など民族的差別撤廃運動も在日労働者階級と連

帯して推進しようとするプランをしていた。その限りでは彼らのプランは正当であったといえる。

ところが、このプランが①日共や全協側に承認され、②在日労働総合全体に同意されていたのか、というと、その意味的討議、検討は両者ほとんど行っていない。金若永ら四名の朝鮮人委員だけが描いたものに止まっていた。しかも、解体・加盟作業を全体的合意の下で推進するのではなく、この朝鮮人委員会が極めて独断的に、急激に、かつ強圧的に行っていた。これに対して検挙されず旧来の組織などのまま残存していた地方から反検挙起って当然であった。とりわけ大阪は在日労働運動を支えてきた中心地であり、金文準は大多数の信頼が厚かっただけでなく、全体で確認されていた産業界別再編成作業も、全国で唯一といえるゴム組合を結成するほど最も先進的に行っていた人物であった。

ところが、金若永はこれら幹部を全て「から新」街頭分子」とおぼして、一部曾々に従属する少数分子らと「朝鮮人委員会関西支部」局を設置して切り立てていった。この動向に金文準らが抵抗するや、「スパイ、投機主義者」等のレッテルを貼り、方法、手段を問わず政治的に排斥しようとし、ここに両者の無原則的抗争が展開

それだったのである。「清世島対本土派」ソに派対火班派「朝鮮解體論対
朝鮮解體論」の対立、という見解は、單なる現象にすぎず、ただ、金受
導き地方の指導者としては有能で、金浩永の対する交換もその理解で
あるものの、金浩永のありかた、加盟後の日本労働者との関係のありか
たは理論的どころか合せず極めて個人的関係で加盟した欠陥を有し
ていた（例えば、金浩永が本部を通さず、全故大政地方評議會本部
と接触し合同しよう）。

ともあれ、在日労働者も金浩永日本労働者側双方共、①在日朝鮮人の賃金、
差別就業差別など民族的差別問題を如何に解決するのか②個々の労働
組合（又は班）における日朝労働者の連帯のあり方や自衛的な労働運動のあ
りか、即ち、労働現場における労働者の同僚連帯のありかたが同一にふされ
たまま合同に至ったことは、単なる組織的合意に止って東の同僚連帯関係の
形成に向つたことが、朝鮮人委員候補後の合同実現は、客観的には日本側
の朝鮮人利用に終る結果を招来してしまった。しかも在日朝鮮側に対して
金浩永、金受導の対立は、①組織能力を露おきして這愚の彈圧のエジ
キと提供し②民族主義者を運動から脱落させ③多くの階級主義者を
も金浩永に加盟させない等の結果を招来して在日朝鮮人運動の危機混成
ともたうしてゐるのである。

朝鮮民族運動史研究（第四一九五九二一山）

報告者 金永義作氏

テーマ 「蔚州における本立三路線の転換について」

前回「九三〇年の同島蜂起」では、五、三〇の後の半島間の同島概要
を報告し、それが同島地方の朝鮮人食糧に限られ、しかも個々の同島が有機
的関連を持ち、一時的暴動で終って、日中官権の徹底的彈圧の前に、
一二月末には壊滅的状況に陥ったこと、そして、単に五、三〇暴動の量的
擴大に止まり、ソビエト地帯形成どころか、遂に民族的対立を強化する結果
を招来した事実を述べた。中共蔚州省委はこの運動の総括を新らたの方
針を提示する必要にせられたが、丁度時同じくしてコミンテルンから本立
三路線批判がなされ、中共中央部が受け入れる意向を示すや、蔚州省委も
その方向にそって路線変更を固ろうとした。一二月三日「南滿蒙大綱」から
その内容を知りながら、過去の同島を批判し、今後早急に「中国農民を基
本動力とし、労働者を組織化し、朝中労働者の統戦線を形成して、恒
常的な遊撃戦を展開する」必要を創案されたところまで、一九三〇年の
一月、二月はこの立場から崩れた党組織の再建が図られていた。
ところが、中共四中全を受けた三月末の蔚州省委大会議ではこの間の転換姿勢
は三中全決意を踏襲した「調和的立場」の不徹底なものと再批判してより
徹底した本立三路線転換が叫ばれた。しかし、目下南滿、形成下党

任務から明らかたように、その内容は、農民協会を基礎とし農民印事を展開しつつ遊撃隊を組織すること、(2)工人農家を中心としこれに中国人を加えること、(3)中国農民の組織化にも力を入れること、と強く批判したはずの「調和的」内容をも後退したのになつてしまった。何故このような矛盾が生じてしまったのか。尚島暴動は朝鮮人食糧を主体とし、彼等の要求と李正三路線が合致した故に果敢な印事が展開したのであるが、一九三三年春段階においてこの状況は変らず、中国農民の組織化は全く進展せず、やはり朝鮮人主体にせざるを得なかった。その結果内部混乱が生じ、(1)極左派、即ち従来の路線踏襲者(2)取柄派(3)敗北主義者(4)右翼派協会主義者などが結局主導として、(5)右派面から対峙し、ついに五三年七月まで「右翼化」した状態に達した。李正三路線の反対派正三唱(実践派)が無政府主義的状态に群衆を分離せしめ結果を招来した。これは李正三路線を強硬でないまま、具体的に印事も展開せず、また中朝農民の民族的対立を煽り、日本の侵略にも対応しなかった「満洲暴動」を迎えてつたことを物語っている。しかも一九三三年のこの経緯の中で、(1)万宝山事件(2)後日の「民生固事」件に連なる滿洲省委の共産党員内にあるの民族的対立を右翼化させる萌芽も作り始めていたのである。

★ 次回案内

一、在日朝鮮人運動史研究関西支部会(第七三回)

報告者 伊藤悦子氏(一九五〇、一三四)

テーマ 五三〇年代を中心とした在日朝鮮人教育運動の展開

二、朝鮮民族運動史研究月例会(第四九回)

報告者 堀内 悦氏(一九五〇、一三五)

テーマ 朝鮮王室の水商船業と労働者

★ 新着図書案内

・韓国史論(4) 柳永愚編 中央大学人文社会科学研究所 86 円

・韓国史の伝統と変革 西江大文化学研究所編輯部 89 円

・東方学志 延世大学研究院編輯部 84 円 85 円 86 円 87 円

・白山学報 30 31 朝鮮風土論 白山学会 84 円 85 円 86 円 87 円

・海峡 13 朝鮮問題研究会編輯 社会評論社 84 円

・釜山史学 9 釜山史学会編輯部 85 円 86 円 87 円

・韓国史論 15 国史編纂委員会編輯部 85 円 86 円 87 円

・韓國学(韓国問題特輯) 韓國学研究所 85 円 86 円

編集部より

原稿は二言綴二枚半程度にし、必ず三五日返稿をお願いします。